

## 支援者部門受賞者

### 精神障害の当事者によるフットサル、バレーボールチームを運営し、社会参加を支援 高槻精神障害者スポーツクラブ（愛称 WEARE ウィアー）【大阪府】

2006年4月、精神科病院のデイケアでバレーボールをしていた当事者チームが母体となり、病院外の当事者や、スポーツが好きな精神保健福祉の関係者が集まり発足した地域型スポーツクラブ。フットサルとバレーボールを軸に、競技スポーツとして活動を行っている。2011年3月、フットサルのチームが精神障害者のスポーツ団体として初の海外遠征を実施。Jリーグのクラブチームとも交流するなど、積極的に地域にネットワークを広げ、当事者の社会参加を支援する取り組みが高く評価された。

#### ●主な活動

現在活動しているのは6人制バレーボールの「あぶやまワンハーツ」、フットサルの「YARIMASSE 大阪」「ゴッデス高槻」の3チーム。精神障害を持つ選手が、全国規模の大会への出場を目指し、勝ちにこだわり練習している。「高校バレー並みにハード」と言うのは、バレーボール部監督の才脇洋一さん。学生時代にバレーの経験があり、2011年から監督を務める介護福祉士だ。一方、フットサル「ゴッデス高槻」の坂井大吾監督は大学歯学部で教員。サッカー好きが高じて監督になった。スタッフの多くは精神科病院に勤める看護師や精神保健福祉士（PSW）だが、練習では当事者の選手に交じって一緒に汗を流す仲間だ。

#### ●当事者主体の活動

練習場所の確保、ユニホームのスポンサー探しなど、運営は可能な限り選手（当事者）に任されている。スタッフでPSWの宗明日美さんは、中・高・大と続けたバレーボールを楽しみつつ、選手が主体的に活動できるようメンタル面からサポートしている。「プレッシャーとの付き合い方を伝えたり、悩みを話せる場を作ったり。スタッフが御膳立てするのではなく、選手から生まれてくる“やろうよ”を大切にしたい」と宗さん。フットサルでは、国際大会にも出場経験のある「YARIMASSE 大阪」の選手が月1回、初心者向けの「ゴッデス高槻」の指導にあたる。

#### ●スポーツがつなぐ地域のネットワーク

代表を務める看護師の真庭大典さんは「高槻市はもともとサッカーが盛んな地域。“ボランティア”ではなく、サッカーが好きだから、楽しいから、精神障害のあるなしに関係なく、いろいろな人と一緒にやりたかった」とクラブ設立当時の思いを語る。2007年、スタッフの熱意ひとつでJリーグのガンバ大阪の協力を取りつけ「大阪スキャンピオカップ」を開催。精神障害者の競技フットサル大会として2回目からはガンバ大阪が主催し、今年10回目を迎える。地域のフットサルチームや高校の女子バレー部との練習試合もあり、地域とのつながりは広がっている。

#### ●設立10周年を迎えて

2016年に設立10周年を迎え、現在記念誌を制作中だ。「継続してやっていくことが大事。頑張り過ぎず、この先も楽しみながら続けていきたい」（真庭さん）



週1回の練習。通院病院による縛りはなく、希望する当事者は誰でも参加できる。ここでの活動がコミュニケーションの訓練となり、再就職を果たした人もいる。



「あぶやまワンハーツ」の皆さん。「勝ちにこだわることで、社会で生きるための力強さを身につける場になっているのかも」と事務局長の中西幹平さん。



「YARIMASSE 大阪」の練習は週1-2回。大会ではガンバ大阪のサポーターが運営を手伝ってくれることもある。